2008/11/8
芦名定道

第３回　礼拝―共同体としてのあなた

（１）礼拝、喜びの時

１．礼拝とは（基本）

「礼拝が『ことば』による主の想起と『サクラメント』によるそれとの二つによって成り立つということが、二世紀初めにすっかり定着していたことを、プリニウスの資料は　示している。」（岸本羊一「第三章　礼拝学序説」『総説　実践神学』日本基督教団出版　局、一二六頁）

「わが国の自由教会の礼拝は『ことば』による礼拝である、といわれてきた。」（北村宗次「第一章　聖礼典と式文」『総説　実践神学Ⅱ』、二九頁）

岸本羊一・北村宗次編『キリスト教礼拝事典』日本基督教団出版局。
越川弘英・竹内謙太郎・今橋朗監修『キリスト教礼拝・礼拝学事典』日本キリスト教団出版局。

２．礼拝とは（本日の問題との連関で）

・時と所を捧げること
・信仰共同体としての教会（主にある教会共同体）の原点
・感謝と讃美（応答）

３．現実の「礼拝」が問題を含んでいることの認識

（２）なぜ、礼拝に出席しないのか・出席できないのか

４．個々人がそれぞれ深刻な事情を抱えていることは理解できるが、それがすべてか。

忙しい、それだけか。

礼拝に出席しなくともキリスト者であり得るということになってはいないか。

５．教会なしのキリスト教？

「しかしながら今日教会の有様はどうであるか」（植村正久「時代の要求と教会の要求」明治39年＝1906年、『植村正久著作集　第一巻』新教出版社、385頁）、「或る観察の鋭い雑誌主筆などは言って居る。日本は早かれ晩かれキリスト教国になるのである。それでなくては文明国の間に仲間交際が出来ないから、自然上下いつの間にかキリスト教徒となってしまうであろう。教会はあっても無くてもそれは同じだ。事によったら教会はかえって邪魔になるかも知れ

ないと。これは一面の観察である」、「余輩は教会が社会の一方に覇を唱え、その中には堅い信仰が充ち、健全な道徳が備わって居るため、浮薄な社会がただ勢いに推されて形ばかりのキリスト教に流れて行くのを或いは遮り、或いは堰き止め、かくて邪魔になるであろうと信ずる。是非こういう地位勢力に致さなければならぬのである。教会とはどこまでも骨格である、柱である。」(同、386頁)

６．世俗社会の中のキリスト教

「大正期のキリスト教界」「元来、日本のキリスト教は文明開化の風潮と共に外国より導入され、言語を媒介として伝えられ、士族出身者や豪農、豪商に受容されたこともあって、知的性格が強かった。この傾向はこの時期にますます顕在化した。これと関連して、キリスト教の私事化、内面化は避けられなかった。」「それと並行して、キリスト教は個人の内面的煩悶や葛藤を解決する精神的指針や人生観を提供する宗教となっていった。これが教養主義、文化主義といった思想的風潮によって助長されたことはいうまでもない。つぎに、青少年時代にキリスト教に入信した場合、大人になり、社会に出たとき、キリスト教も卒業する信徒があらわれた。複雑な思想構造をもつ日本の社会は必ずしもキリスト教によい土壌ではなかったからである。」（土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、229頁）

７．礼拝は、日常生活全般との密接な関わりで捉えられねばならない。

（３）信仰の個人主義化？

８．問題

礼拝は喜びとなっているか。

９．自由を制約することの意味

自分の欲望のままに好き勝手に日曜日を過ごし、よっぽど時間が余れば教会へ、あるいは自分に関心のある催しのあるときに教会へ。

これは、キリスト教信仰の求める自由か？

（４）他者と共にある自由

10．真の自由？！

バルト『キリスト教倫理Ｉ』（新教出版社）

「人間であることは、神の前で応答してゆくことにおいて存在することで

ある」
「神に対する応答の責任」＝「神に対する自由」

11. 制約することから開ける喜び
・「モーセの第四戒」「祝日の戒めは何を命じているだろうか。それは人間の行動の限界づけである」「労働の中断」「このこと・この仕事の中断こそ祝日である」
「祝日の戒めに服従することは、仕事の休みと礼拝出席である」
・他者と共に神の前に立つことの喜び
「神の戒めによって休み、神のみ顔を仰いで祝い・喜び・自由にされることなくして、どうして自分の仕事と対人関係の意義を見いだせようか。まさにこの祝日の、逆説的な「行為」こそ、他のすべての日々の行為の出発点なのである。」
「祝日の戒めはまた、身体と精神と社会の保健と関係している。すなわち、人道的な意義をもっているのである」、しかし、「祝日の本来の目標からはずれた単なる人道的見地からだけの休日は、必然的に失われた日曜日なのである」「このような休日は、人から重荷を取り去って元気づけるどころか、もっと重荷を負わせるだけである。」

12. 他者のために自由を制限することが他者と共に生きることを可能にし、それを通していわば個人主義的喜びとは次元の違う喜びの時となる。

13. 成熟した人間の自由と喜び（子供らしさ≠子供っぽい）
「14:20　兄弟たち、物の判断については子供となってはいけません。悪事については幼子となり、物の判断については大人になってください。」（I コリント）

14. 個人主義的信仰ではなく、個人として成熟した信仰
生活における一人でいることと他者と共にいることは密接に関わり合っている。
礼拝とは、このダイナミズムが教会内に生じる特別の場・時（恵み）。
ボンヘッファー『共に生きる生活』新教出版社。

15. 週日との連関における祝日（他者との連関における個人としての生活）
祝日の過ごし方は週日のあり方にどんな質的差異（違い）を生み出しているだろうか。

（５）現実の教会の問題として

16. 教会におけるキリスト者としての訓練
信仰は成熟のプロセスであり、成熟は信仰的な課題である。

17. 「5:11　このことについては、話すことがたくさんあるのですが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、容易に説明できません。12　実際、あなたがたは今ではもう教師となっているはずなのに、再びだれかに神の言葉の初歩を教えてもらわねばならず、また、固い食物の代わりに、乳を必要とする始末だからです。13　乳を飲んでいる者はだれでも、幼子ですから、義の言葉を理解できません。14　固い食物は、善悪を見分ける感覚を経験によって訓練された、一人前の大人のためのものです。」（ヘブライ人への手紙）

18. 教会の中においても、
忙しいから礼拝に出ない、
礼拝に遅れる、
礼拝堂以外の場所にいる
↓
礼拝よりも優先するものとは？
「礼拝に出る」ことについて、様々な形態が存在する？
・病床での聖餐や受洗
・祈りにおいて
cf.　サイバーチャーチ、仮想空間に礼拝を移すことは可能か？

19. 工夫が必要　→　様々なレベルでの語り合い
すべての教会員が礼拝臨席できるための真剣な工夫がなされているか？